

ゼラチン シルバーな 写真家

Vol.20

取材=編集部

米国ニューヨークのInternational Center of Photography (ICP) でカラーフィルムプリントを学び、現在は東京近辺の 公募展・企画展を中心に活動している。http://www.natishida.com



「自分が見た世界の色を、全暗室で行うカラープリントで再現する」

仕事で様々な国を訪れていたという NAT ISHIDA さんは2000年、アフリカのミニサファリで撮ったカバの写真がうまく撮れず、ちゃんとしたカメラを買おうと決めて、キヤノンEOS 7を買ったのが、写真を始めたきっかけだ。

「その後、写真はたくさん撮っていたのですが、サービスプリントに出した時、自分の見せたい端の部分が欠けてプリントされていた。それなら自分でプリントすればいいと夫にすすめられ、当時NYに住んでいたのでICP (インターナショナルセンターオブフォトグラフィー) の社会人向けのコースに入って、Gerald=Gerryという先生からカラープリントの暗室技術を学びました。それ以来暗室にハマってしまって、他のコースも取るようになったんです」

NYには3年くらいいて「New York Public Space」というテーマで写真を撮っていたが、日本に戻ってからはしばらく写真から離れていたという。

「新しい仕事を始めたばかりで余裕がなく、だんだん仕事にこもっていくようになって、これじゃダメだと思っている時に、日本写真学院のチラシを見て、ICPと似たようなコースの組み方でした。八丁堀で自宅からも近く、これはいいなと通うようになりました。それまで私は、人のいない風景を撮っていたのですが、卒展の準備のためにいろいろ撮った写真を見ていたら、岡嶋和幸先生が、人の写った写真がいいねって言うてくれて、人のいる風景も撮るようになりました。今もそうですが、時の流れ、人の雰囲気を感じられるもの、なくなりつつあるものを記録にとどめておきたいと思っています。1枚の写真だと表現できないもの

のをストーリーのように複数の写真をつなぎ合わせて見せたいと始めたのが、この卒展からなんです」

モノクロよりカラープリントの方が好きだという ISHIDA さんは、自宅からも近いアトリエ シャチーニュに10年近く通って、定期的にプリントを行っている。

「カラープリントは全暗室の中で行いますが、じっくりと写真と向き合う時間も好きです。プリントしたデータは、数値をメモに取って、次の時に同じようにプリントできるように管理しています。私のカラープリントは少し緑や青みがかつてるとか、色が違うと言われることもあったんですが、自分が見たままの色を可能な限り再現したい。レンブラントの絵って光や色が独特で、それが彼の特徴かなと思っていたんですが、実際にオランダに行ってみたら、レンブラントが描くそのままの色だった。だから私も自分が見た色を写真で再現しようと思っています。次は埼玉にあるねじ工場を撮る予定です。現在、厚木にある Bar HATIS (<https://hatis.jp/>) で『Oasis in the City』というテーマの作品を6月21日から8月中旬まで展示しています」

「Craneimals」

「晴海埠頭にクレーンが立ち並んでいる姿が動物たちのように見えて、ペンタックス67 IIで撮りました。それを大全紙にプリントした写真にフラミンゴなどのミニチュアフィギュアをおいて、立体作品にしました」



「Honeybox」

DATA キヤノンEOS 7・EF50^{mm}・コダックポートラ400・フジカラープロフエッショナルペーパー Pro-D (原稿はカラー)